広告

市指定文化財 旧長野商店の公開スタート!

市の指定文化財になっている旧長野商店をご存じでしょうか?

長野商店は、明治7年創業の米穀呉服雑貨を扱う商店で、親船町7番地にありました。当時の石狩を代表する商店の一つで、石造りの店舗と石蔵が特徴です。店舗は明治27年建築、石蔵は明治10年代と推定されていますが、これは道内でも一、二の古さです。道路の拡幅工事のため、昨年から移築復元作業を進めていましたが、いよいよ4月29日(日)から一般公開を始めます。

店舗の内部は、明治から大正時代のお店の様子を復元しました。

石蔵では長野商店の歴史と明治から大正時代の石狩本町地区の様子を展示しています。

見学には、「いしかり砂丘の風資料館」で入館券をお求めください。

場所　弁天町30-5(いしかり砂丘の風資料館隣)
公開時間　9:30～17:00(毎週火曜、年末年始はお休み)
入館料　300円(5月1日から)

【現地見学会】

復元に当たった学芸員が、旧長野商店のオモテからウラまでご案内します。現地集合・現地解散で、事前申し込みは不要ですので、お気軽にどうぞ。

日時　4月29日(日)10:00～16:00に1時間おきに6回実施(12:00～13:00は休み)
※雨天決行
費用　200円
問合せ　いしかり砂丘の風資料館　☎62-3711

◀解体したときの記録をもとに、当時の建物を復元しました。老朽が激しかった部分には新たな材料が使われており、新旧の香りが漂う店内です。

◀石蔵内では長野商店の歴史や当時の本町地区のジオラマ模型などが展示されています。

▲長野商店の家紋(柏)がほどこされた、輪島塗りの会席膳一式。おひつや湯桶までもがきれいに残っているのは珍しく、資料価値が高いそうです。

▲卯建(うだつ)
卯建とは、石で作られた大きな壁のようなもの(写真右の点線で囲んだ部分)で、防火の役割を果たしていました。卯建は財力の象徴であり、『卯建が上がる・上がらない』の語源になっています。

◎石狩随想 10

泥濘の風景

◆長野商店を想い出す時、風景の向こうに幼いころの自分の存在を意識する。今とはまったく違う世界観の中にあって、古いながら個性を主張したお店が長野商店であった。◆明治から大正にかけてのキュビスム画家萬鐵五郎の初期の作品に、郷里土沢の「雪景色」を描いた作品がある。私にとってこの絵は長野商店と重なる風景であって、雪の中に埋れるというより、早春の泥濘たる道を車馬があえぎ通るものであって、明治期の秘めたる活気を感じる。◆秩父事件の指導者の一人、伊藤房次郎(井上伝蔵)は明治二十年代石狩に隠とんの身を窶し、小間物屋を営んだのが長野商店の隣であった。房次郎の故郷、下吉田村は秩父の山間の奥深い処にあって、養蚕で生計が立てられていた。井上家は代々伝わる名家で㊐の屋号は今にも伝えられるほどである。房次郎は隣で小さな商いをしながら豪壮な石倉建てと長野商店の卯建にどんな思いを抱いたであろうか、房次郎は今、弁天町の歴史公園に刻んだ

俤の目にちらつくや魂祭り(柳蛙)

の一句を残しているが、歴史の現実に胸打つ思いである。石狩の栄枯盛衰をながめ見た石蔵のアーチ窓。今、何を思い見つめているか。(市長)